

漢字は一年生で学んでも六年生までに覚えればよい

漢字を取り立てて、特別に指導しないのが石井方式の特徴です。ただ、読めないで、つまづいている時に、その読み方を教えてやるだけです。意味がわからないようだったら、意味も教えてやります。

決して、初出で、その漢字が読めるようにしようと思っははいけません。一度学習した漢字が、二度、三度繰り返されて、それで読めないでいても、やはり最初の時と同じように、軽くその読みを教えてやるのです。

そして、繰り返し、繰り返し提出して、何十回になろうとも、読めるように、頭にはっきりと刻みつけられるように導くのです。

読めるようになったら、ますますそれを使う機会を作って習熟させます。算数の文章題に、理科や社会科の説明に、掲示に、あらゆる機会を求めてその漢字を使用することに努め、自然と習熟させるのです。そうすれば、字形についての認識も、しだいに深まっていきます。

その言葉とともに、字形も思い浮かべられるほどに習熟した頃を見はからって、“書く”指導を行ないます。すでに頭の中に描けるようになった漢字を、どこから書き始めて、どのように完成させるかを教えるのです。

従来の“書く”学習と違って、いっぺんに整った字を書くようになります。子供たちも楽しんで書きます。

昭和三十六年「朝日ジャーナル」で“漢字をめぐる諸問題”を話し合った時に、輿水実氏が、「日本では、漢字が最初一回出たところで覚えさせる原則です。だから、子供としては、あとは、家で書き取りをやる以外はない。」とおっしゃっていましたが、それが事実です。

しかし、こんな愚かしい指導は、一日も早く止めるべきです。自転車を与えて、「さあたった今乗れるようにしなさい。」と言って、だれが乗れるようになりますか。そうではなくて、自転車を与えて、あとはほっておけば、だれだって乗れるようになります。

漢字だって、初出で、読み書きともにできるように求めても、それはできませんが、気長に反復練習させれば、だれだってできるようになります。

それよりも、なぜ初出で、読み書きできるのを求めるのか、私にはその理由がわかりません。私は、六年生配当の漢字でも、一年生で提出する機会があれば提出します。しかし、「提出したから覚えろ。」ではありません。できるだけ、目に触れる機会を与えて、六年生を終えるまでには確実に習得させよう、という考えなのです。これが、石井方式です。